１１．大久保　大助氏（特定非営利活動法人 KID’s work 代表）

「北九州市は人が育つまち。課題に対して、皆で解決していこうという雰囲気がある。」

大久保　大助（おおくぼ　だいすけ）
北九州市出身。
子ども・若者の「考える力」「決める力」「行動する力」を育むことを目的に、市内で、キャンプや通学合宿などの体験活動を実施。行政や諸団体との協働事業やボランティア関連、子どもの体験活動等に関する講演や研修、まちづくりセミナーの講師、子ども向けの防災講座や地域での防災の講座や訓練、地区防災計画の策定などにも関わっている。

「青少年育成に取り組むきっかけ」

私が体験活動を始めたのは、中学 3 年生の時。北九州市の青少年課が主催したキャンプに参加したことがきっかけです。高校時代は、野球部に在籍していたため、キャンプとは縁遠い生活をしていました。実は、高校 2 年生の時に青少年課からキャンプリーダーとしてのお誘いをいただいたのですがその時は行けず、高校を卒業してから、市政だよりで「ボランティア募集」の記事を見て、今度はスタッフ側としてこの世界に足を踏み入れました。

「子どもから若者への成長を見守る社会を」

以前は、市の「少年自然の家」の活動や、町内の「子ども会」も活発で、家族以外の大人たちや、年齢の異なる人たちに出会う場もたくさんありました。しかし近年、自治会の存在価値や地域でつながる意味も、ますます薄れつつあります。地域の行事に参加し、声をかけあう。そんな環境の中で、いろいろな方々に見守られ、認められていることを感じながら成長していくという意味は大きいと思います。

ボランティアや市民活動については、大学生や 20 代前半で興味を持ってくれる若者もいますが、数は多いわけではありません。また、一定時間以上ボランティアをすれば、単位になるという理由で参加する学生さんもいますが、それを目的とした参加には違和感があります。

「コスパ（費用対効果）」や「タイパ（時間対効果）」などの合理的な考え方が主流になっている今だからこそ、「子どもから青年に育っていく過程を社会が見守る」ということがより一層必要になっていると思っています。

「みんなで課題に対し考えることができる」

一時期海外にも身を置いていましたが、北九州市に戻ってきておもしろいなと思うのは、いろいろなことが良い意味で「ごちゃごちゃ」しているところ。加えて「都市だけれども田舎」いう点も好きです。

まちを構成するのは「人」ですが、北九州には様々な分野の様々なプレーヤーがモザイク的にいます。何か困ったことがあると、みんなでどうにかしようと考える雰囲気があります。

また、いい意味の「隙」もあるので、「よそ者」が入る余地がある。課題に対し、一緒に考えることができる基盤がある。そのような取組みをしてきた先人の歴史もある。市民活動の分野でもできることが多いなと感じます。

北九州には課題もたくさんありますが、それもポテンシャルだと言えます。課題を単に困ったこととして捉えるのではなく、取り組むべき共通項として捉えることで、みんなで考えるためのリソース（資源）になるからです。重要な

ことは、その課題に対して、市民活動はもちろんのこと所属や立場を越えて意欲ある人たちが一緒になって取り組むことだと思います。

「人が育つまちであってほしい」

北九州市に願うのは、やはり「人が育つまちであってほしい」ということです。人を育てようとする意欲を持ち、かつ具体的な行動が伴うことで人が育つ場は作れると思います。

北九州市には、大学が多くありますが、就職による市外転出が課題と言われています。しかし、出ていくことを問題と見るのではなく、縁あって北九州で過ごした若者に、「北九州で学べてよかった」と思ってもらうことに注力するのもひとつです。人を育て、他都市に送り出すことができれば、北九州市に親近感を持つ「北九州ファン」を市の外側にもつことになります。

人口の減少する時代に、敢えて北九州市は「いい人材を輩出していくまち」となれば、まちの新たな価値が生み出されるし、そんな北九州に魅力を感じて、北九州に居続けたいと思ったり、北九州で暮らしたいと思ったりする人も出てくる可能性もあるのではないでしょうか。

「地域に愛着を持った若者を育てるために」

北アイルランドで暮らしていたときのことです。友人と話しているときに「あなたの国ってどんな国？」と聞かれたことがありました。そのときに浮かんだ「日本」は、皿倉山、工場、煙突からの煙、貨物船、洞海湾、若戸大橋でした。どれも、子ども時代に遊んでいた八幡東区枝光から見ていた風景です。いつの間にか、自分が地域に愛着を持っていたことに気づいた瞬間でした。

子ども時代に家族以外の地域の人に声をかけてもらったり、手をかけてもらったりした経験は、地域への愛着につながると思います。北九州市には、海も山もあり自然が豊か。さらに、子どもの育ちに関心を持ち取り組む人たちもたくさんいます。こうした特長を活かして、地域全体で子どもたちを育んでいきたいと思っています。よい子ども時代を過ごすことで、その地域がその人のふるさと（＝帰ってくる場所）になると信じています。

「古き良きものは残してほしい」

「古き良きもの」は、残してほしいと思います。例えば東田第一高炉は、私にとってふるさとの風景のひとつですが、子どものころに解体の話が出たことを記憶しています。しかし、そのとき残そうとして動いてくれた方々がいたおかげで、今もその姿がそこにあります。

こうした北九州の「古き良きもの」は、建物だけでなく、地域の風情や人の価値観などにも感じます。「不易流行」。古いものの保存は本当に有難いと感じていますが、未来に残すべき大切なものは、この東田第一高炉のように残していけたらと思います。

「自分が一番になれる土俵を探すこと」

現在わたしは、NPO 法人の代表として子ども･若者のための体験活動をしています。小さな団体ですが、仲間と共に大事にしていることは「人と同じことをしない」ことです。他の団体との差異化を図り、新しい価値を創り出すためには、思い切って振り切って突破口をつくることが必要になります。他のものと比べるのではなく、新しい価値を創り、一番となる土俵を探すようにしています。

そして、それは北九州市に対する想いでもあります。2023 年現在、政令指定都市のうち人口減少率が 1 位の北九州市ですが、増やすことだけが正解ではないと思います。例えば、「高齢化が進んでも住みやすいまち」「人口が減っても適応できるまち」など、新たな土俵で日本一となれるように、北九州の魅力をさらに高めていくのも素敵じゃないでしょうか。